

Genius English Writing

生徒の意欲を大切にした教科書

佐野正之



1. Writing 指導の基本

Writing 指導の基本は、書く意欲が起きる課題を設定することです。生徒の生活や気持ちと関係のない和文英訳や穴埋め問題は、本来の writing 指導ではありません。それは記号としての英語を教えているだけで、writing for communication とはほど遠いものです。こうした指導に偏ると、生徒が持っている自己表現の意欲を無視し、彼らの能力を不当に低く評価する危険があります。

試みに、生徒の興味のある話題、たとえば好きな音楽について「自分の書きたいことを、誤りなど気にせず書いてごらん。また、読んでほしい人をイメージして書いてみよう」と指示して、後は分からない表現の手助けに徹し、2～3時間の授業を割いてみてください。その間、生徒は初稿を書き、人に読んでもらってコメントをもらい、それをもとに書き直しの作業をすることになります。

驚かれる先生も多いかもしれませんが、書くことなど大嫌いだと思い込んでいた生徒が、辞書を引いたり表現をたずねたり、思いが相手に伝わるよう工夫するし、また、作品は予想以上の出来栄になることが多いのです。「文法が大事だと思ひ込み、生徒の意欲を考えなかったこれまでの授業は、教師の自己満足ではなかったか」と反省させられるものです。

もちろん、課題さえ与えれば十分といっているわけではありません。この種の活動は3、4回すると伸びが頭打ちになり、生徒の意欲も急速に失われるからです。植物にたとえれば、根に栄養を与えないまま、開花だけを促すようなものですか

ら、成長が止まるのも当然です。適切な指導は欠かせません。だが、指導で一番大切なのは、栄養となるインプットを与えることなのです。インプットあつてのプロダクションです。たとえ、文型の定着を図る活動であっても、ターゲットの文を何度も教師が話して耳からインプットし、それをもとに T-P や P-P の対話をし、その後、音読やディクテーションをさせ、コントロールされた表現から次第に自由度の高い活動に取り組ませるのです。和文英訳も、実はインプットを与えるひとつの手段であって、それ自体が目標ではありません。文法指導やフィードバックも必要ですが、誤りの訂正ばかりしている教師は、水も肥料をやらずに刈り込みばかりしている庭師のようなもので、本末転倒です。

2. 意欲とインプットのバランス

さて、Genius English Writing では、生徒の意欲を大切にしながら、英語の基礎を学習するためのインプットを与える工夫を全編にほどこしています。まず Part I はモデル文がストーリー仕立てになっていて、ある高校生のところに突然手紙が来て文通が始まり、やがて交流がほのかな恋愛感情に発展するという筋書きの中で、高校生の学校や日常生活での話題がふんだんに取り入れられています。それぞれのレッスンには、中心となる文法項目が設定されていて、文法練習も和文英訳もあります。しかし、モデル文や活動はインプットとしてあるのであって、暗記させることが中心ではいけないのです。

授業の進め方としては、まず、日本語でも英語でもよいから、学習する話題について生徒の興味を引く導入をします。たとえば、「もし突然、外国からメールが来たら君ならどうする？ どこの国の、どんな人と交流したい？ どんなことを書いてくるだろう？ どんな風に伝えればよいだろう？」と関心をあおっておいてから、このレッスンが終了した時点では、何ができるようになって欲しいか目標を明示します。次にモデル文の音声を聞かせ、教師と生徒の Q and A や生徒同士の対話、教科書の音読の後、自分が返事を書くときに必要だと思う表現に下線を引かせます。もちろん、文法的な説明や例文の解説も簡単にしますが、それはやがて生徒が書くメールに役立つことを意図して行います。というのは、文法や語彙の定着は、結局は生徒が言いたいことを表現したいという必要性にかられて生ずるからです。この意味では、実際に、外国の高校生とメールの交換ができるような機会を授業外でも作ることができればすばらしいでしょう。

ですから、Part I では、生徒が伝えたいと思う情報や、日頃考えたり感じたりしていることを表現できる楽しさを感じさせながら、書く活動に取り組ませることが必要なのです。

たくさん聞かせ、話させ、書かせるなかで、必要な項目が使いこなせるように指導することが大切です。今、話題になっている評価規準の観点でいえば、「言語に関する知識」を重視するよりも、「表現の能力」をいかに伸ばすかが問われているということができそうです。

3. パラグラフへ意識を向けさせる指導

Part II では、いろいろな目的を持ったパラグラフを書く力を伸ばすことがねらいです。具体的には、自分の考えを整理したり、事物を描写したり、事件を記述したり、意見を説明したり、議論したりするなど、多様なパラグラフが扱われます。ただ、ここでも一昔前の「パラグラフ・ライ

ティングの指導」とは異なるアプローチをしています。すなわち、パラグラフの構成の知識を先に与えて、それに沿って書かせるのではなく、まず、自由に書かせ、その上でパラグラフにも意識が向くことを意図して構成されているのです。他の教科書では、パラグラフの知識を与えることを売りにしているところもありますが、生徒の立場になって考えてみてください。文法、すなわち、文のレベルの知識でさえ運用するのに苦労しているのに、その上にさらにパラグラフのルールまで同時に意識して書けといわれたら、意欲もなにもあったものではありません。まず、自由に表現させて、その作品を見直すなかで、効率よく情報や意見を伝えるための談話上の要点に気づかせます。この教科書のパラグラフ指導は、そのためのインプットを与えることを意図しているのです。意欲が第一、次がインプット、その後のフィードバックという流れがここでも生きているのです。

4. 評価規準との関連

ご存じのように、高校でも絶対評価が導入され、評価規準が準備されています。英語 I の「書くこと」の規準を参考にして Writing の評価規準を考えれば、「関心・意欲・態度」「表現の能力」「言語知識」が評価の観点となるはずですが。別の言い方をすれば、生徒にいかにして書く意欲を持たせるのか、また、自分の考えなどを書いて伝達する能力をどう伸ばすのか、さらに、必要な単語や文法や談話構造の知識をどう伸ばすかが教師に問われることになります。中でも重要なのは、「書く表現能力」です。ただ、その基盤になるのは意欲です。ですから、意欲を伸ばす工夫が最も大切だともいえるでしょう。文法や談話構造の知識も必要ですが、それはあくまでも「書く能力」を補助するためのものです。ですから、この教科書は指導要領の精神に合致した作りになっているのです。一度、手にとりじっくりと検討してみてください。

(さの まさゆき・帝京大学教授)